
死の逝く先

カイリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死の逝く先

【Nコード】

N1794E

【作者名】

カイリ

【あらすじ】

もし、死んだ人間を蘇らせることが出来るといふ『反魂術』を使えたとしたら？

（前書き）

この話は『てのひらの中のバラ』の番外編です。短編としても読めますが先に本編を読んだ方が分かりやすいかもしれません……。

反魂術が使えたとしたらどうする、と今しがたまで原稿用紙を前に唸っていたルイが聞いてきた時は、それこそすぐには言葉が出なくなるほど驚いた。

それはナユタも同様だったようで、執務机の書類から目を離して眉根を寄せる。

「反魂術なんて、よくそんな言葉を知ってたな」

「今日のね、古典の授業で西行法師が死人を生き帰らせる話をやったの。それで先生が、死者を蘇生させる術を反魂術って云うんだって言ってた」

少し誇らしげに言う彼女をちゃんと授業を聞いていると誉めてやりたいところだけれど、同時にそのようなことを彼女に教えた教師を恨めしくも思った。そのうえ彼女が私たちにした質問は宿題の作文のテーマになっているというのだから困りものだ。

「俺には別に生き返らせたい人なんていないからな」

ひらひらと手を振ったナユタは、ちらと此方を一瞥して目を細めた。私の答えを牽制するように。

「私もご遠慮したいね。反魂術で蘇るのは肉体ばかりで、心は戻らないというじゃないか。それでは寂しいばかりだよ」

「うーん、そっか。自分だけ覚えてるのは寂しいもんね」

「ああ。それより大切なことは、己自身、そして周りの人々との間に悔いが残らないように生きることだろう？」

そう言っただけをくしゃりと撫でてやれば、ルイは擦ったそうに肩をすくめた。

「そのこと、作文に書いてもいい？」

「構わないよ、君の助けになれて光栄だ」

「ばか、全く助けにならん。流惟も、自分の力でやらなきゃ意味がないだろ」

*

「あれはあんたの本心なのか？」

「あれ、とは？」

「反魂術の話だ」

ソファに腰掛けていた私に赤ワインを差し出したナユタは、自身も一人分のスペースを空けて右隣に身を沈める。

ノンフレームの眼鏡の向こう側にある 그레이 がかった瞳は、無関心を装うように窓の外を眺めていたけれど、確かに返答を望んでいるようだ。「本心だよ。私が言っても説得力は無いだろうが

一度死んだ人間を、生きている者の意志で蘇らせるなどということ
は、命への冒瀆だ」

「それでも一度くらいは試そうとしたことくらいあるんだろう」

「そりゃあ、思ったことくらいはある。しかし、そんなことをしたところで、生き返るのはリヨウではない。外見はリヨウであるのに、心がないなんて耐えられないよ」

赤ワインを一気に煽る。元来私は酒には強いたちであるのに、この時ばかりはくらくらとめまいがした。

「それは、あんたのエゴだな」

「そうだとも。生き返らせたいと思ったのも、生き返らせたくない
と思ったのも、すべては私の勝手な意志だ。 だから、反魂術
は、死者への冒瀆なのだろう」

死んでしまった者の意志など、まるで無視してしまっているのだ
から。

自嘲を湛えて言うと、ナユタは僅かばかり不機嫌そうな顔をして、
私に視線を向けた。

生粋の日本人であるのに 그레이 の瞳は、リョウのそれとそっくり
だ。酷似した双眸が映し出す視界もまた、同じなのだろうかと思え
ば、ひどく心が穏やかになる。

「君こそどうなんだ。さっきのは答えにはなっていないだろう
例えば、考えたくはないけれどもし、ルイが死んでしまったとし
たら」

ナユタは片眉を持ち上げて小さく鼻を鳴らした。

「俺が生きている限り流惟は死なせない。俺はのために医者にな
ったんだからな」

「ずるい答えだな。そうやって直ぐにはぐらかすのだから」

「ふん。嘘がつけないのはお互い様だろ」

ナユタは Y シャツの胸ポケットから煙草を一本取り出し、口にく
わえた。私は彼の手に握られたシガーケースから一本を抜き取って、
ナユタがそうしたように口元に持っていた。彼は不機嫌な顔をす
るかと思っただが、意外にも快くライターを放って寄越す。

「あんた、煙草吸えたのか」

「吸えないことはないが、好きではない」

「随分と自虐的じゃないか」

「性分なんだね」

吐き出す紫煙が例えば反魂香のように死んだ者の姿を映すもので
あったなら、私は煙草を吸い続けたろうか？

粹狂で頭にふと浮かんだ疑問をそのまま言葉にしたところ、ナユ
タはくつりと喉を鳴らして、

「その時は俺があんたの火を消してやるよ」

笑った。

「リヨウは君の曾祖父だよ？」

「分かってるよ。だが、死んだ人間より、今生きている使いつ走りの方が使い手はあるからな」

冷たい物言いだが、仏を敬わず、怖いもの知らずなその態度は、かえってリヨウと彼との血の繋がりを感じさせた。

「それは、心強いことだな」

肺一杯に息を吸い込んで吐き出した紫煙は、私の視界と嗅覚を奪っていった。

— e n d ?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1794e/>

死の逝く先

2010年11月26日07時16分発行